

【第 36 回個別発表抄録】

家族関係の曖昧さへの態度に関する理論的検討

—家族の Well-Being に着目して—

中嶋 史織 (岩手大学大学院)・野中 響子 (岩手大学大学院)・大坊 沙理菜 (岩手大学大学院)・奥野 雅子 (岩手大学)

友達が自分に好意的であるのか、敵対的であるのかわからない場合や、試験の結果が分かるまでの間など白黒ははっきりしない曖昧な状況は日常に多く存在する。曖昧さとは、十分な手がかりがないために、適切な構造化や分類化ができない状態と定義され、新奇性、複雑性、不可解性の3つに分類される (Budner, 1962)。曖昧さへの耐性が低い者は、生活事件の脅威を高く感じる傾向にあり (増田, 1998)、曖昧さへの不安の態度が強迫傾向や抑うつ傾向と関連が強いことが報告されている (西村, 2007)。一方、曖昧さに寛容な者は自己・他者・社会への肯定的な評価感情が高く、自律神経系の安定がみられることが示されている (吉川, 1986)。つまり、曖昧さに対し非寛容であることが不適応に、寛容であることが適応につながることを示唆されてきた。

孫は多くの高齢者にとって重要な生きがいの中のひとつであるが、その関係にも以下のような曖昧さが存在しうる。祖父母の世話の特徴として、親のような責任をもつことなしに、孫たちを愛し、世話し、導くことができることが挙げられる (Erikson, 1986)。また、祖父母・孫関係には特に親の関与は避けられず、これらのことが祖父母と孫の両者に曖昧さをもたらすこともあるだろう。さらに杉井 (2006) は、中学生・高校生は、否定的な感情を抱きやすいという。中学・高校の時期はアイデンティティの獲得が課題となる時期であり、祖父母は成長していく孫の中に自分とは違う価値観や信念を見つけていく。孫は成長とともに、祖父母に面倒を見てもらう立場から、客観的にその存在を敬い、健康と長寿を願う立場へ移行していき (渡辺, 2008)、自立した個としてむしろ頼りにされることを望むようになるのではないか。そのような変化は関係性の中で曖昧さをつくり出し、それと向き合い、折り合いをつけていくことが求められ、それにおいて祖父母・孫関係特有の難しさや向き合い方があるのではないだろうか。

加えて、誰もが経験する曖昧さとして死に関する出来事が挙げられる。例えば、大切な人と死別した後の関係性のあり方である。大切な人の喪失については、故人への情愛のエネルギーを撤収することがグリーフワークの1つだと主張されている (Freud, 1917)。その一方で、故人との繋がりを維持することが悲嘆を緩和することが示されている (Klass et al., 1996)。また、故人と新しい関係性を形成することが重要であるとする視点も示されている (Boerber & Heckhausen, 2003)。これらを踏まえると、死によってこれまでの関係が続かない曖昧さを明確化し、かつ科学的には証明できない生者と死者という曖昧な関係性を保持して生きていくことの心理的意義が示されていると言えるだろう。

以上を踏まえ、曖昧さに対し寛容であることが適応に繋がることがこれまで示されてきたが、家族関係においては一概に言えないことが示唆された。例えば曖昧に対する過度な寛容さは、家族の暗黙のルールを変更する必要性を無視することや、物理的には存在しない故人との曖昧な関係への執着に繋がり、家族関係の病理を引き起こす可能性がある。一方で、曖昧に対し寛容であることが、曖昧な発達段階に置かれている孫を受け止め、適切な関係を築くことや、生者と死者という曖昧な関係を継続することに繋がり、心理的に重要な意味を果たすと考えられる。したがって、家族関係という観点から捉えると、曖昧さへの非寛容と寛容は相反する概念ではなく、相補的な役割を果たしていると考えられる。